



季
解
改正月令博物考
三冬部
四

5
529
12



三冬之部目錄

△印あるハ前より季ふ
用いさるるをうり

時令之部

△冬風

冬

△冬霧

△冬日

冬

△冬月
△月晦し

△冬雨

冬

△山眠る

△寒夜
△冬の夜

冬

△冬曉
△寒き朝

△さむ空

冬

△さむい

△凍

冬

△はるれ

△雪
△六花
△六出

冬

△雪山

△雪粥

冬

△粉雪

△雪花
△六花
△六出

冬

△ちつと雪

△雪肌

冬

△雪空

△雪聲

冬

△雪消

△富士雪

冬

△雪中
△妙茶

△霜

冬

霜柱

霜花

霜花

霜水

霜夜

霜夜

はたし霜

水

水

氷聲

露氷

露氷

鐘氷

氷の轄

氷の轄

冬混雜之部

此部は時令草木を以て記す

炭

炭

炭

炭竈

炭

炭

摺

摺

摺

白炭

白炭

白炭

炭斗

炭

炭

炭

炭

炭

塗

塗

塗

火桶

火桶

火桶

湯婆

湯婆

湯婆

紙衣

紙衣

紙衣

綿

綿

綿

足袋

足袋

足袋

綿帽子

綿帽子

綿帽子

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

水漬

○此書の本文をいろははひりく
 月令以呂波分惣目錄と題号
 を名づけ別ニ賣出しやい
 冬季節ふ用ゆるものハ勿論冬季節に
 用ひきくもの物までも俳狂の
 便ふふる事又八月並ふ艸木魚
 鳥の異名和名古名ハ聲ふあひ
 くくいろは分ふ出は。本書ハ注
 解のうごうし死の又ハ出所の落
 つる物ハ此目錄の條下ハ辨明と本
 書ハ二處三處ありく委し誤ハ何
 らの部ハ沖津鳥この部ハ恋鳥
 部ハ秋凌九十九誤ハ春の凌の所ハ春凌ハ出
 みのハ水無月六十一水無月の出處ハ葉集
 部ハ水無月五葉出本文ハ水無月ハ故ハ此の
 余ハ准して知るべし其外狂・俳
 詩・哥の便ふふる事多く載る故
 此目錄むかりやても會席などに懷
 中ハ失忘ハ備ふべし

三冬之部

冬の異名和名冬の神等
十月の初日

時令

此部ハ冬三ヶ月の時候
ふかりの事ハ

冬風

哥ハふかりの事ハ
讀又音寒く吹きふしと云

占冬南風吹ハ三日ハ霜多し寅
考卯の日風ハバ其月ハ風多し

哥 我やらの指のさるふり
ハのりしをさひこうやと 式部

をさるふりハ冬のさるふり
ハのりしをさひこうやと 式部

俳 冬の風はよても雪おせ野明
雪ハふはるもさうつもの風 蓮二

詩 冬風五字對句

同上

黒帝行威肅 雲岳千岩瘦
冬ラツカサトル神 雲ハカツタタケモ風ハ

飛麤意氣雄 霜林萬葉飛
カセラツカサトル神 霜ハモノノエ林モカセラツカサ

イキモスサニシイ
アイタノ木ノハガトヒナ

詩 冬風

出自薊北行疾風衝塞起

薊北トイフ所ヲ出テユケハゲシイ風ガ陣ゴヤラフキタラスヤウニオコリテキタ

沙磧自飛揚牛馬縮如蠅

スナモコイシモニナヒトリテニトビアルユヘ牛馬モスグンデ子ツミホドニナツテニエル

冬霧 秋の霧ほどふくむは霧冬

哥 山あもくそくつ門きう乃

詞 知むけ千を迷ふなえく

俳 狂 狂きうれ目ほゆるも細代も

冬日 黒道とて北のくまをゆく

哥 ぼくをよめよのあはれいきて

詞 ぼくをよめよのあはれいきて

俳 狂 狂きうれ目ほゆるも細代も

狂 日あかりのこのまのけき

詩 冬日五字對句 同上

忽忽短晝光 漸過三竿外

融融浮和氣 初添一線長

詩 冬日詞 白居易

果果冬日出照我屋南隅

坐和風入肌膚

ノ家ノ南ノスミラテラス

トシタル冬ノ日が出テコキ

三冬 時令 冬ノ二

ノドカノ風が分 初似飲醇醪又

如蟄者 撫 外融百散暢中

適一念無 曠然忘所在心與空虛

俱 何レナラ心カヒレテカウレテ井ルコトモ

冬目 書宮中ノ女ノヌヒ針ノワザヲ以

故事ニ日長ニシカヲコノロニハカルニ

冬至ノ後ハ一日ニ糸一スナツタ多

クヌハルト云リ 唐雜錄ニ出

冬月 月さゆる△月とことすト

枕草帝お老のけといふ

たふふふととととれたものなり

さゆふハ澄きよけの甚きなり

哥 拾遺集 友輔

おののおれ池の氷乃さやけさ

月のひらうのさうさうと

千載 平實重

夜をかきひとふ歩のトむさく

夫木 大納言經信

名はうくよりとてぬる風

むへころ月をくぬふうりさ

續古今 家隆

たふふふくば油よりさ

時ふふふる有明の月

詞 氷やとる。このえにふる。消くま

るに。雪ふかふく。このまさうぬ

みされ芦の末まふ。雪にさう風さる。

氷うもさうぬけ。雪ふまおおく。

俳 襟花ののけふとてその月 蒲丈

の月やつまふきけも松ハ松 其角

狂 ころいさくやのやうれる教い

老のけいしそまざるを月 貞左

冬雨 冬の雨とこほふ

多くハ雪ふふとつらう

哥 ふふふの雪にさうりやをの雪

嵐やふふ吹こほふ人 為家

この里とてかきつりてふるゑに
外山をこれハちそつるる衣笠

非 冬のおまきけりる板やハ羅人
扉のきもつれてさひーをの雨加十

狂 ださくも山ハ終るさうをのあ
うれつにたれおこせと 信徳

山 眠 冬山の姿をいふ四季の山乃
姿をいふ詩あり次あるに

詩 四季山之詞 卧遊録出

春 山 淡治而如笑 春山ハササリトシテ
人ノエメルヤウナ

夏 山 蒼翠而如滴 夏ノ山ハアヲクトキ
タホフヤクナ

秋 山 明淨而如粧 秋ハサツサトシテカ
サリタルヤウナ

冬 山 惨淡而如眠 冬ノ山ハモサセシウテシ
ツツタコノナリ

右の詩の心を以て季に春ハ山ハ笑ふ
秋ハ山ハ粧冬ハ山ハ眠るト三ツ出して夏の
山滴を季に用いざるも非の掟

寒 夜 冬の夜。秋の夜ハものさ
ひーににりーかぬる物なれ

とそれハやうかりてさひに
らうぬる冬の夜のさほなり

哥 夫木 為家

おのう世いろくは人のあ
おのう世いろくは人のあ

非 冬をこれハねを添ふるは支考
夜やさしそあを添ふ一鼠

狂 冬をこれハねを添ふるは支考
夜やさしそあを添ふ一鼠

狂 冬をこれハねを添ふるは支考
夜やさしそあを添ふ一鼠

詩 冬夜七字對句 詩 礎

起 看 北 斗 寒 垂 地 鴛 衾 冷
オキテニレハホノホシノヒカリガ
サムゲニ地ニタレテミエル

俯 听 長 江 流 有 聲 獸 炭 消
フシテキタチヤコウニガテアリコエ
ウツムイテキケル水ノドウク
ト音ガシテナカレ

詩 冬夜五字對句

曉 角 催 寒 漏 アカツキノフエノ音ガ
サハイトケイヲモヨホシ

孤 燈 旋 落 花 ヒトツノトモシビガヤモ
スレバハナラオトス

冬曉 ふゆのあけ △さむき朝 非 暖や我つけ 初る梅のまゝ 荷兮

哥 雪玉 ゆきたま ねきのまゝおれ保くたゝ 暖のおもてて袖ふちき月々

詩 七字對句 詩礎

屋頭木葉翻寒片 おくとうもくは ころも かんぺん 茅店月 かやみ づき

牆角梅花吐暗香 かきくつかり ねむのうが かな かげ 板橋霜 いたはし 霜

さむ空 非 ちむやや木ワて見 ちう入おるけ 宙存

さむ さむ 非 三日月の一弦さ 支考

凍 こ △さむ 凍ハある月どふら ちう入おるけ 宙存

非 ちう入おるけ 宙存

非 ちう入おるけ 宙存

非 ちう入おるけ 宙存

非 ちう入おるけ 宙存

非 ちう入おるけ 宙存

非 ちう入おるけ 宙存

非 ちう入おるけ 宙存

非 ちう入おるけ 宙存

非 ちう入おるけ 宙存

非 ちう入おるけ 宙存

非 ちう入おるけ 宙存

非 ちう入おるけ 宙存

非 ちう入おるけ 宙存

非 ちう入おるけ 宙存

非 ちう入おるけ 宙存

非 ちう入おるけ 宙存

非 ちう入おるけ 宙存

非 ちう入おるけ 宙存

非 ちう入おるけ 宙存

非 ちう入おるけ 宙存

ひらきと入る雪はねのふれ
雪のかゝの山のふりやれ

雪玉 谷雪

雪の雪にさかして谷の戸に
雪乃梢やさく入る雪

同 川邊雪

氷の上にもつりは流る川
さくまやうねの雪ふ及人

夫木 湖邊雪

同 夫木 湖邊雪 為家
雪の雪にさかして風のふりやれ

風雅 行路雪

雪の雪にさかして風のふりやれ
雪乃梢やさく入る雪

夜雪

小舟

雪の戸にさかして風のふりやれ
雪乃梢やさく入る雪

夫木

名所雪

為家

雪の雪にさかして風のふりやれ
雪乃梢やさく入る雪

詞

雪の雪にさかして風のふりやれ
雪乃梢やさく入る雪

雪の雪にさかして風のふりやれ
雪乃梢やさく入る雪

雪の雪にさかして風のふりやれ
雪乃梢やさく入る雪

雪の雪にさかして風のふりやれ
雪乃梢やさく入る雪

雪の雪にさかして風のふりやれ
雪乃梢やさく入る雪

雪の雪にさかして風のふりやれ
雪乃梢やさく入る雪

雪の雪にさかして風のふりやれ
雪乃梢やさく入る雪

雪の雪にさかして風のふりやれ
雪乃梢やさく入る雪

雪の雪にさかして風のふりやれ
雪乃梢やさく入る雪

雪の雪にさかして風のふりやれ
雪乃梢やさく入る雪

雪の雪にさかして風のふりやれ
雪乃梢やさく入る雪

雪の雪にさかして風のふりやれ
雪乃梢やさく入る雪

雪の雪にさかして風のふりやれ
雪乃梢やさく入る雪

雪の雪にさかして風のふりやれ
雪乃梢やさく入る雪

連 初きとるもにうする物うれ豊通
母ふるやその原山のもれ声紹巴

俳 我もとあり人の情しきの上其角
市人ふいてこれうんもこのを芭蕉

雪 初はけり切り井や初花の陽 宗甫
ふあこんてもきほとまは初は 徳元

狂 火をさる風ゆりのおのる 蓼太
かゝるさるをさるにかりうと

天地無塵事 妬舞時飄袖
ひとけぬる天地あり 貞徳

詩 雪五字對句 同上
さるふもさるもさるのういあまど
ぬるさるもさるもさるのういあまど

江河有篆文 欺梅併壓枝
江一河ニモて篆文書 梅ハ一枝ニモて篆文書

拂樹驚梅早 尖峯排玉筍
ホフハラシメハヤサキノ 尖カサキハ玉ノタケノ

凝陞類月殘 圓石疊銀盤
フミタニニカタツテアル 圓石ハハシロカキノタラヒ

詩 雪七字對句 詩礎
三千世界銀成色 犯長沙

十二樓頭五作層 沒樵路
ナニノロウノヤチハ五ノカサノイロ 沒カサノイロ

看來天地不知夜 梅花信
カウミレハ天地ノチタニ夜トイフ 梅花ハ信トイフ

飛入園林總是春 柳絮風
トビエイルン スベテニレハル 柳絮ハ風トイフ

雪ノ瓊林玉樹冷艷寒光
詩詞 タノハヤシト 玉ノカヘキト ヒヤカニラ サムクシテヒ

呈瑞散銀盃 花意思 鋪作月
ハナガサニハサウキ ハナノニハサウキ

呈瑞散銀盃 花意思 鋪作月
ハナガサニハサウキ ハナノニハサウキ

呈瑞散銀盃 花意思 鋪作月
ハナガサニハサウキ ハナノニハサウキ

呈瑞散銀盃 花意思 鋪作月
ハナガサニハサウキ ハナノニハサウキ

呈瑞散銀盃 花意思 鋪作月
ハナガサニハサウキ ハナノニハサウキ

呈瑞散銀盃 花意思 鋪作月
ハナガサニハサウキ ハナノニハサウキ

呈瑞散銀盃 花意思 鋪作月
ハナガサニハサウキ ハナノニハサウキ

詩 雪詞

唐祖詠

終南陰嶺秀積雪浮雲端

終南山ノ三ニカカフニエバツモツタユキモク
モノハシニウイテアルヤウナ

林表明霽色城中增暮寒

林ノ上ニハレタルナシキガアキラナクオモヘシ
ロノウチニハ日クレノサハサガニサツタ

詩 同

柳宗元

千山鳥飛絕萬徑人踪滅

山ノノユキニトリノカヨヒモニヘスイヅクノ
ミチモユキニウモレテヒトヲトモナシ

孤舟蓑笠翁獨釣寒江雪

ヒトツノフ子ニニカサキタオキナゲウテヒトリサムイ
江ノキダシキヲオモシロカツテウチハツリテ井ル

雪日本之故事

香爐峯雪

雪れふくふりた
ろりーと一條院

はーちく出させうてかゝる
のありさぬいふ人とおぼせれ
くれバ御前ニ在々清少納言こと
むハちくて御簾と巻上り帝
ことの外感いさせうとやこれ
次ふちる詩の心を合せうり

詩 朗詠集

白樂天

遺愛寺鐘欹枕聽香爐峯

雪撥簾看コノ詩ハ樂天が山トイフ
トコロノ山莊ニ居シテ東
ノカベニ五首ノ詩ヲタイセラレタルソノウチ
ノ第四ノ詩ナリ廬山トイフトコロハ遺ア
イキトイフテスニチカク
カワホタノフモトナリ

俳 携あるすれ内もるの海 蝦明

雪山

雪ふる時ハ藏人所の衆大
内ハ参して藤壺ふ雪の山

とつきと一條院の時より始て後
伏見院永仁のころ迄はじとぞ今ハ
絶より枕草帝曰志すの十余日の
やに雪いじうううをいふ式都
丞右衛門ありたれはとね出しく
おまのうさ雪の山作とふぬ示そ
あまき山景のつやも煙きまうり下略

俳 富士ハ一抱附のるふけ雪の山霞外

雪粥

雪のふりたるを藤原仲文
院の御所へ参たらに院の御粥

哥 白粥のふりたるを仰らねるを
おらしたるを哥と仰らねるを

いとくくふふふふふふふふふふ

俳 白雲や此月の光を梳の御 東窓

粉雪 是まぐ草ふふふ粉雪
丹波の粉雪といふ雪ハ

よねをつきまふふふに似ふふふ
なう溜るふふふふふふ丹波とそそ

鳥羽院稚くねふふふて雪のふ
るふかく仰られと讃岐黄侍日記ふ出

俳 山風や雪の粉ふふふ呉兵卿
玉兔杯とて粉雪とてするふ香

雪唐 柳絮 謝太傳安トイフ人兒
故事 女ヲ内ニアタテテ文ヲ講

論ス俄ニ雪フルヨツテ兄ノ子朗トイ
ヘルニ問テ曰白雪紛々何ニ方似タル

朗答テ空中ヨリ塩ヲフラスカゴトシ
トイヘリ又兄ノ女ニ問フ答曰柳

絮ノ風ニヨツテ起散如シ安モ奇
オヲ賞シテ悦フ世説新語ニ出

俳 ふふふふふふふふふふハ連国
のたと記し風ふふふの柳ふハ素仲

雪 蕪武單于ニ使ス單于ト
ラヘテ北海ノ上ニオク食ニ

乏シトナカラ雪ト起毛トヲ雷
テ數日不死遂ニ漢ニ歸ル

放馬 齊國ノ管仲旅中雪フ
カキニアフテ道ヲ失フ其

時老馬ヲ放テ行クニ任ヒテ隨ヒ
行ハ遂ニ道ヲアヤニラストカヤ

雪花 △六花天上ニ瑞木アリ雪
ヲアツテ瑞木ノ花トス

△六の花といふ。草木の花ハ皆五出
なり雪のみ独り六出有と月令廣義ニ出

俳 馬の尻ふふふの花ちる山崎ハ支考
老馬ハ花ハふふ六ツのふふ文洞

ふばら雪 木の葉ちどにつり
たる雪のさうくとと

俳 ねておきぬふふふふふふ荷風
雪肌 世間美人と賞はる言葉ニ

まふふふふ雪とつてはふふ

詔ミコトノミコト乃ノ隨ス今イマ季キとウるベーレれ
らの事コトうつ衣キうぎの例もあり

雪空ゆきそら 雪ゆき催もよほいの雪ゆき氣き 非（非）雪ゆき免めんち
目めくくの耳ふ新く一品

霜しもととととううハ雪るるの雪梅うめ五

哥 為相

風かぜといふもおわるる雪ゆきにおりりく
月つきやさるけの雪るるをけき

雪聲ゆきこゑ 音おとをいう

非（非）風かぜハほら小裏うら表おもてりうちの声こゑ 嵐あらし雪ゆき

詩 雪聲詞

石泉凍合いしづみとうがふ竹無風たけむかぜ夜色よいろ沉しず

沉萬境空しんばんきやうくう 伊いシしノいツツニニモモホホリリカ
ハハリリワワタタケケニニカカゼゼノノオオトトモ

試向靜中しきやうじやうちう

閑側耳かんがわみみ隔窓くわさう撩乱りやうらん撲春くつしゅん虫むし

フフトトモモノノシシツツタタナナウウキキニニ耳みみヲヲララフフババダダテテキキケ
ハハニニドドヲヲハハダダテテハハララククトト春はるノノココロロムムシシガガキキヤ
ウウシシニニアアタタルルヤヤウウナナオオトトガガススルルユユハ
アアククテテミミタタレレババユユキキガガフルフルテテアアツツタ

雪消ゆきけ 昔むかしハハ雪ゆき多おほくおほるる時ときハハ探たん

飢并菓物うへひくわぶつとと互たがひにに相あひ讀よみる

これを雪けこれーーとといいふふ是こゝろをを喰くひひて

寒さむきををわわるるとといいふふこころろ 日ひ並なら記し事こと出で

富士雪ふじのゆき 富士ふじふふハハ四よ時じ雪ゆきるるゆゆへ

志連しれん哥かおおくくわわれれ等らふふハハ冬ふゆとといいふふ此こゝろ

事大ことおほ論ろんありあり委まかしし補おぎな遺ひきふふ出でる

狀 雪中之文

朝來六花呈瑞あすけ ろくはにぞみぞみ彌望やぼう為な一いつ

色之瓊瑤いろのじやうぎやう來き歲さい之の豐とよ可か知し

矣や差さ拙せつ畏おそ寒さむ徒ただ傲あ衣え安やす閑かん

門擁かどを爐ろ唯ただ仰あが神かみ仙せん來き賞しょう之の而を已や

○書しよ有あ寒さむ氣き歲さい暮くれの條見み合あををし

妙めう寒さむ中ちゆうのの雪ゆき水みづをを貯たくわへへつつ移うつるる

用もち也やれれハハ一いつ切きのの熱ねつ毒どくをを解とくく

雪中ゆきちゆう夜よ寒さむ手て足あしここぬぬ法ぽう 胡こ柳りゆうををニにツツ割わりりああくくううくくいいとと

續古今 谷水

為尹

氷のそとにふるをせはるる水の
ゆくもわくあるころな

新秘撰 湖邊水

内大臣

馬のけうや水のふとゆく水の
はもるあふよとやうん

柏玉 葦間水

馬のけうや水のふとゆく水の
あーのふもあふよとやうん

夫木 薄氷

小侍從

けさうもふるはるる水のけも
野ものかきふる水

詞よとてある山風ふる。おのの
はるあふよとやうん

入江の山麓。おのの袖。細代。音
たき。山川。ふ。実。ほのたき。

さ。水。の。面。お。は。る。け。の。お。も。
舟もふる。う。は。は。る。波さく。

一の羽。ひ。こ。ふ。る。
一とせと見るハ水のかきふる宗祖

俳 氷七字對句

氷七字對句 詩礎

寒生玉 指紅先透 寒侵玉

光遂金刀 翠欲消 冷浮銀

氷ノ 孤聽 後人モ水ノ上ヲ行

○本朝信州諏訪 湖モ氷厚クニ人

馬氷ノ上ヲ往來ス先 狐來テ渡初ル

ヲ見テ人モ行キ通フ 春氷解ベキ前

ニ狐歸ルニ是ヨリ人モ不渡トイヘリ

氷聲 氷をこく声なり氷はくひて氷をこく声なり

又舟をこく声なり 此音をこく声なり

文楊延秀揮子敲氷文曰

釋子金盤照曉氷彩絲穿

取富銀鉦敲成玉磬穿林

響音忽作玻璃碎地聲

露氷 露結ひて霜と云ふなり

鐘氷 かひの音のうえて氷るが如きなり

氷の轄 氷解るなり

冬混雜 此部ハ日令時令草木かといふる品とのとる

炭 別名鳥銀種類切炭池田炭炭頭輪炭炭灰團

右の外種類ハ次ニ記シ今撰州池田の邊ふくやくりの池田炭又切炭

といふく日本諸州の茶人といふ此ところの炭を用ひぬ木さく

やくといへばくぬぎ炭ともいふ輪炭と池田炭の大成物を薄く

切た形車のよれ如し故に名づく炭頭ハ炭の俵一俵の内ふすと十

五と大わりのありをいふ炭團ハ炭を粉うて丸くする物

炭竈 炭焼小野炭和哥山山城といふ山同はく山常陸

といふ山同はく山常陸といふ山山城といふ山同はく山常陸

といふ山同はく山常陸といふ山山城といふ山同はく山常陸

といふ山同はく山常陸といふ山山城といふ山同はく山常陸

といふ山同はく山常陸といふ山山城といふ山同はく山常陸

といふ山同はく山常陸といふ山山城といふ山同はく山常陸

といふ山同はく山常陸といふ山山城といふ山同はく山常陸

といふ山同はく山常陸といふ山山城といふ山同はく山常陸

といふ山同はく山常陸といふ山山城といふ山同はく山常陸

といふ山同はく山常陸といふ山山城といふ山同はく山常陸

といふ山同はく山常陸といふ山山城といふ山同はく山常陸

といふ山同はく山常陸といふ山山城といふ山同はく山常陸

○炭がまハ山のくそに穴をほくりをきと
めり薪を多く入ましく炭の焼く

哥拾遺集炭山本とぬみたる小焼つ
ちとくさむとさ小の炭の好忠

夫木(か)うれの炭やきあられぬとて
人さば人のたのむりのうハ おおく

詞花(か)ううやく炭の焼く
やうくやうけのきとく人 匠房

金葉(か)うまにう門焼く(小)や山ふ
さるけのきとく人(か)けり 師時

新喜(か)同教(か)きけふさう炭の
ううさ(か)き大束の里(か)内觀

詞(か)とと木。すき。さうさ(か)き
ととまの山。焼の(か)さ。あひく焼。

さうさ(か)き。さうさ(か)き。けつ
さうさ(か)き。炭やき。炭焼(か)き。

○さうさ(か)きの(か)きとよは
んやう(か)きを(か)きとよは

年ハ(か)きに(か)きとよは
年ハ(か)きに(か)きとよは

昨炭(か)きの(か)きとよは 支考

炭(か)きの(か)きとよは 支考

炭(か)きの(か)きとよは 支考

炭(か)きの(か)きとよは 支考

炭(か)きの(か)きとよは 支考

炭(か)きの(か)きとよは 支考

炭(か)きの(か)きとよは 支考

炭(か)きの(か)きとよは 支考

炭(か)きの(か)きとよは 支考

炭(か)きの(か)きとよは 支考

炭(か)きの(か)きとよは 支考

炭(か)きの(か)きとよは 支考

炭(か)きの(か)きとよは 支考

炭(か)きの(か)きとよは 支考

炭(か)きの(か)きとよは 支考

炭(か)きの(か)きとよは 支考

炭(か)きの(か)きとよは 支考

炭(か)きの(か)きとよは 支考

炭(か)きの(か)きとよは 支考

炭之 胡桃炭 唐宋世ニハ炉ノ炭ニクルミヲ用フルヲトス

獸炭 唐ノ羊琇ト云ル人炭ヲ獸ノ形ニ作り酒ヲアタムトカヤ

製法ハ炭十斤鉄屑十斤合を搗テ糯米ニテ子リ乾テ用ル時ハ火キエズ

楮 ハハ火ノ骨薫炭ニハかくハ株杭ノ木ノ根を灰の中ニ入

其上ニ火をいけハ自然ニ火ノ内ニ山の中ニ埋火ノ用とル哥

おもむくのう門ニ火をいけう

非 登ニ此百歳の祖ネハ炭左東

廻炭 ハ中ニ炭をいけ杭立のたえけハおもむくの置る炭を

あけハ客人おもむく置る炭をい

非 二の儀のそいせハロウす其裔

白炭 ハ花炭ニ枝炭ニ多くハ燭の木をやけハ灰中ニ埋

こめを白くするハ枝の形ある也枝炭ともいハ河州北の龍ややく

花炭も同所より出或ハ梅の花もふやけ竹ノ葉もふ存ハ名品なり

非 白炭やきうするハ枝ニ柳

賣炭翁 ハ炭賣人ニハ炭賣や翁のほめを其翁

詩 賣炭翁詞 東坡

積火變深黥 ハ火ニツキ上レバ牙角

齒忽怒 ハ牙ノ角ノセウニツタ火ノイキリヲイカセウニミエル

炭斗 一名烏府ハ炭入る器なり

助炭 助炭ハ炭をたをくす云てハ炭のわいのことなり

爐 ハ冊炉裏ニ地炉ハ今茶人の用るハ方一尺四寸ニ山家のもの又寒國のものハ其製大ニ昔堂上おもむく其製大なり

埋火 ハ火ノ火ノ哥ハ火の題ハ埋火を詠ミ又ハ火の詠ハ前ハ出

哥 夫木一山好のそいせハ金せ埋む火のうもあて世もあてね 俊成

恒も火のちやうねやうのさようけり
こゝろちやうねやうのさようけり
式内親王

詞 火のくさくさ。埋火のくさくさ。炭を
くさくさ。埋火のくさくさ。炭を

やうをさうぬ。ねぢぢ ねぢぢ かきお
これ ねぢぢ ねぢぢ。いひがらにやうな

煙火のお
はのやとお
えいとう
おひ
こが。ひの煙火。きんやうでめ

田。うきうきとくわにこがも。
運運。歴史のいきいきな記述を

のふはぐも此のこえはしめあきかたれ
 をしめつくふのこえをいひあうり
 (車) 里大平本つ下りこえもぬ 昌木

つゝも火よりく廟や雪の寒
紹巴

煙火中ねろくおのふろ力支考

詩
爐詞
楊審

天地風相日夜新
天地ノ間ニ風カ吹
タリ

イソカシサウチ 地炉穩坐煖如春（俗）

筋骨已暢心無

人イヨクハツカシフ思フハコノヤウキトキカクモニ
スル人ハマドノユキアカリテ書ヲヨム人モアラフ

客來寒夜火爲媒且吞声

サマイヨニ客ガクレハ炉ノ火ヲ
ムセバヤウチ
カニエオトガ
キウイナク

煖酒仍將羊栗煨
蚯蚓鳴

塗炉縁ぬろゑ 春はるはこうう立たゆふ木き地ぢのろ 縁ゑを用もちいふ冬ふゆはこうう是こゝを用もちふ

火燵こたつ 置火燵おきこたつ
し近世の好こつハむうな
ー

侍ハ後ニ切テ之ヲ示
支考

世をわくのまゝ加ふる巨魁也 許六

狂 權權へ斤量のおろす極らくへ

卷之四

シヨクヲシニキ 燕寝覆時 薔薇合
ガウキタツヤウチ 歡擁處 效死 爲 鶯 鶯
カシキテ子ルキ引
カフハヒスイトイ

フトリノモヤウモモツテアリ 婦人ライダクト
キウキキレハモヤウノラシドリノマナスルヤウチ

蒲團 ふんぐん ハ蒲の穂わさ成
稲 穂 芦の穂など入れ

ふりりのまう木綿ハ近世の事
非 びりりころふふ人の野けい芭蕉

狂 ぞ、坂東のあふかつくめを
ふふふふをわたりめめめ 千竹

紙衣 △紙衣ふふふ△紙衣を
老人の着てかろくて風

をふせぐゆへに製衣をふふ
非 若き 衣のきぬや紙衣を其角

頭巾 △丸頭巾△角つきん△法樂
ころん四角ふ仕立ふをぬ

い丸くうらうらうを帽といふ漆
でぬうらうを冠といふ唐令ふ

くの時服をたふふふ、頭巾二枚
とありこれハ礼服をいふなり

日本ううハ頭巾を著く人ふ達
事を無礼といふ

非 足巾ハ後かた門くう襦袢支考
君のみのきうぬぬも改巾ハ五樓

足袋 堂上ふも四季ふも召ば
民間冬の用といふ

種類 △皮足袋。刺足袋。木綿足袋
雲肩ふびなど品ふあり

狂 我ハハあふもゆて革ふびや
苦ふふふねの掉もゆふ若室

綿 △綿打△綿櫛△延綿△唐綿
やあふけふ三秋の部綿取の條出

束綿 △綿つむ△臂綿。右いづれは
わく作れる形ふふて名づ

綿帽子 婦人の頭巾△婦人頭ふ
いたくを礼といふ夏を

羅 羅を用い冬を綿を用ゆ
非 狸をて女おせし給帽子 舊里

狂 給帽子わぬのうけけう
二ハの肩乃山のいふき

與射

綿衣 真綿まわたにておぢやふく製する物
ちうちうと付て冬の下着といふ

水漬 寒氣さみきの節ふし鼻はなより水乃
ふとれりふとれりの出るをいふ

疥 寒氣さみきの節ふし人の
手足に病やまく 皸かさ いの甚くても口の
ひきて切きるをいふ

寒瘡 冬ふゆ手足てあしの赤くもれ
るをいふ 冬ふゆの病なり

非 竹たけの皮かわをたぎてつるを桶おけ松子
の湯ゆやいふ物 猫ねこの耳みみ 其角

妙 霜しもやけハ蛭むしの壳か身みともに見え
菜な火ひやうけ其汁じのつぎをうけては

○餅もちハ山蜂さんちゅうの巢うの黒くろや飯いつふ
ふて付る 冬ふゆの皮かわ又西さいの皮かわの予よた

ると胡麻ごまの油あぶらを付る又アサあさの
てもは猶なほくは妙薬めうやくと云ふ本有

冬艸木 ①如斯印にょしおんの十月又
十一月の季きも用もちふもの

新 冬ふゆの四季しきとも伐きるもの
と奇きや冬ふゆの題だいよりいふ

胡蘿蔔 本艸綱目ほんそうこうもく曰い元時
始はじテ胡地こちヨリ来きル

根ねハ人參じんじんに似にタリト故ゆへ本朝ほんてうにて名なづ
非 せんあんのをハ畑はたけに田いりひハ一海

狂 せんどんのわらひをうていふふ出て
つゝいふもふとをいふ 貞柳

葱 冬ふゆ葱しよ△福ふくふうのいとも
△吉きち 紀き 和名わな 葱しよ 根ねふう

く入くく喰くふも根ねをうと
色いろは福ふくふう又福ふくきわくといふ又中

空くうなる色いろはうのくさともいふ又
丸まるく長ながく 枝えだを 故ゆへ一文字

と名づくミオ國會きかいふ出でり

非 冬ふゆの露つゆはれてねきの白しろ髪かみや青あお祇

哥 職しやく冬ふゆ哥か合が 紅べに毛けをて秋あきもりるの
うの毛けもあつたむと云ふ月つきなる

枯野 艸木そうぼくとも冬ふゆ枯かる野のといふ
さうき景色けいしきといふ

哥 いろくのはれ色いろのふと出でり
ふとくくをいふはこれ 有家

草ハ冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
イハレテ冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
光俊

非 冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
東史

狂 冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
京景

朽野 冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
木野

哥 冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
赤人

非 冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
騎崔

冬木立 冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
素秋

寒艸 冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
昆吾

霜 冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
昆吾

非 冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
昆吾

冬生類 此部ハ三冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
生類

鷹 冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
鳥

種類 冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
鳥

雀 冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
鳥

鳩 冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
鳥

角鷹 冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
鳥

非 冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
鳥

狂 冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
鳥

右の内 冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
鳥

こい等 冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
冬ニ生レテ冬ニ枯ルモノヲ云フ
鳥

大鷹狩

△鷹狩 △鷹野 小た
うはつてい小鳥をとる

と秋より大鷹をつつし大鳥を
とるハ冬よりそれをも鷹狩と
いふおしとて冬とともなる

哥 夫木

俊頼

日影をそのけりてうす
かこのふたふたもくしり

ふきまにけいふのふきまを
月つねのみうせてややまや国信

樹へし今ふともかこのけり
ふきまにそのふたふたもくしり 雅經

詞 ねうり。かうり。かうり。かうり。
けいふ。あふふのふきまのふきま

やうと尾のたう尾のふたふたのふきま
ふきまのふきまのふきまのふきま

のふきまのふきまのふきまのふきま
ふきまのふきまのふきまのふきま

ふきまのふきまのふきまのふきま
ふきまのふきまのふきまのふきま

ふきまのふきまのふきまのふきま
ふきまのふきまのふきまのふきま

ふきまのふきまのふきまのふきま
ふきまのふきまのふきまのふきま

ふきまのふきまのふきまのふきま
ふきまのふきまのふきまのふきま

ふきまのふきまのふきまのふきま
ふきまのふきまのふきまのふきま

ふきまのふきまのふきまのふきま
ふきまのふきまのふきまのふきま

ふきまのふきまのふきまのふきま
ふきまのふきまのふきまのふきま

ふきまのふきまのふきまのふきま
ふきまのふきまのふきまのふきま

ふきまのふきまのふきまのふきま
ふきまのふきまのふきまのふきま

ふきまのふきまのふきまのふきま
ふきまのふきまのふきまのふきま

ふきまのふきまのふきまのふきま
ふきまのふきまのふきまのふきま

ふきまのふきまのふきまのふきま
ふきまのふきまのふきまのふきま

ふきまのふきまのふきまのふきま
ふきまのふきまのふきまのふきま

無名氏

草盡

フリ風ニナ
ク冬枯ノ

却
月

ヒナカサ
タル弓八月

卷之四

雄を連

居の
上たふ

木なり

洛陽所

み
下
た
う

卷之四

25

行

卷之四

系之

洛州の

ちりり

おそれて

飛とく

532

く

方々
て匡

卷之六

五

1548

とふ枝折
萩屋

クニノ声

Joseph

鷹犬 たういぬ △狩杖。鷹タリノと云
連々ゆく大と鷹犬と云

狩杖、鷹狩のとき利ゆく大は
いさゝちるたうより杖より

千鳥 ちどり 正字衛と書異色、そき鳥
言葉より季不用の来

物ハ奥の詞の條、△印有見合べし
千鳥ハかもし類してせきんいふ似て

小江川。海。入江等水辺に在て群き
いほばよびくさくいふ千鳥といふ

哥 うた 夕々ハ佐保の月夜の川風
友とていふくさくさく 友則

風 かぜ 夕々ハ佐保の月夜の川風
夕々ハ佐保の月夜の川風 頭仲

柏玉集 月前千鳥
夕々ハ佐保の月夜の川風

雪玉集 濱千鳥
月もまほもきよと溪也に

同 泊千鳥
月もまほもきよと溪也に

同 湊千鳥
月もまほもきよと溪也に

同 湊千鳥
月もまほもきよと溪也に

碧玉 岸千鳥
月もまほもきよと溪也に

詞 ことば △川子もさきく △村もさきく
△小夜千もさきく △花もさきく

△浦もさきく △波もさきく △友千
もさきく △友千もさきく

△やちもさきく △やちもさきく △やちも
さきく △やちもさきく

△やちもさきく △やちもさきく △やちも
さきく △やちもさきく

△やちもさきく △やちもさきく △やちも
さきく △やちもさきく

△やちもさきく △やちもさきく △やちも
さきく △やちもさきく

△やちもさきく △やちもさきく △やちも
さきく △やちもさきく

狂 シノムシ 女の女夫のせきか
あふるは ふるせん の神 芳室

詩 鴛鴦詞 古師老

江島濛 煙霽微 綠蕪深

處 羽毛衣 江中島が毛ヤレトキリダニ
ニクイノニテライクサノハエテ

波頭驚起 ルアタリニオシリガキレイ
ニモゴロモラセウツテ井ル

一雙去飛上 文君舊錦机 イッサクトラシムホトケ
イッサクトラシムホトケ

へんがく レバソコヲオドロイテタツテメオト
レデトシテユクハサダメテ卓文君トイフヤウ

十ウクシイ女ノオツテ井ルニシキノ上へ
イテソノニシキノニヤウニナルデアラフ

詩 鴛鴦五字對句 同上

文采負奇色 和鳴多好音 シサイオフキニシタ
クマイオホシコウイレ

イロクノウクシヒモ奇色 夫婦ナキカハスヨイ
ナイロヲ負フタトリシヤ コエが多イ

白頭心共在 交頸意何長 ハクノウ コロトモニアリ
カウケイロロナキ

必 シノラシ 下リハ友シタニ 子ルキハシラハキガヘイ
デトオモフ心ニアルトシヤ ツモコロカシタモトミル

鴛鴦 韓憑魄 カニヒヤウハ
大夫韓朋一名憑ト

故事 云へル人妻甚美く

康王コレヲ棄フ憑怨テ自殺ス

妻コレヲ聞テカナシミ或日王ト

臺ノ上ニ上リテ遊ブトキ臺ヨリ落テ

死セリ懷中ニ書アリテ憑ト一ワニ葬玉

ヘトシルセシカド王ユルサステ塚ヲナラ

ベテ別々ニ葬シカバ一夜ノ内 ニツノ塚ヨリ

木ハエテ上ニテ枝ト枝ト相連リ鴛鴦

嚮來テ其木ニスム朝暮カナシミテ

啼コレヲ連理ノ枝ト云搜神記ニ出

鴛鴦の衾 夫婦ヤウバニ所ノ衾
をいへぬふん心又ヤウバ

をぬいぬふふふ余もものうら

又ヤウ鳥の水ニナリ居ヤウ。又

ヤウ鳥の雌雄ヲ交シ所ヤウと

もいふとヤウ鳥の相ニナレヤウと

ヤウ鴛鴦帳鴛鴦嚮をいふ

哥 とありぬ の余のおもひかも
ふ代をきぬるヤウのゆゑ 家隆

鴛鴦の杏 堂上カ又ハ僧家ニ用ル
眞高トイフ死ハスヤウ

詞 水あそび。うきうき。氷のいま氷の
うへ。こやのは。さびけおす。こゆお
うきね。じやうかう。羽がいのこも。
つらの枕。羽風よおる。みぎふとく。
とさうきも。ほしてたぐ。すたぐ。おる
のトやと。ふふふ。おる。おる。おる。おる。
うら。おの村。おる。おる。おる。おる。
○右の外。おる。おる。おる。おる。

連 ちやを。おる。おる。おる。おる。宗碩
能 うら。おる。おる。おる。おる。嵐雪

浮寐鳥 水鳥のうら。おる。寐と
いふ。うき鳥。おる。おる。

哥 ちや。おる。おる。おる。おる。隆房
いふ。おる。おる。おる。おる。

連 風ふけ。おる。おる。おる。おる。宗養
おる。おる。おる。おる。おる。立英

狂 きの。おる。おる。おる。おる。おる。
うら。おる。おる。おる。おる。おる。舊四

鷓 此鳥。おる。おる。おる。おる。おる。
巧婦。おる。おる。おる。おる。おる。東雅。おる。

木兔 鷓。木兔。おる。おる。おる。おる。
おる。おる。おる。おる。おる。おる。八月の條。おる。

鱈 △塩鱈。俗。おる。おる。おる。おる。
故。おる。おる。おる。おる。おる。おる。和字。おる。

味 生。おる。おる。おる。おる。おる。おる。
おる。おる。おる。おる。おる。おる。おる。至

絶品。おる。おる。おる。おる。おる。おる。
頭。おる。おる。おる。おる。おる。おる。白石。おる。

り。性寒。おる。おる。おる。おる。おる。おる。
おる。おる。おる。おる。おる。おる。おる。至。日。おる。

是を釣。おる。おる。おる。おる。おる。おる。
おる。おる。おる。おる。おる。おる。おる。和重

狂 おる。おる。おる。おる。おる。おる。
おる。おる。おる。おる。おる。おる。おる。羅人

雲陽 鱈。おる。おる。おる。おる。おる。おる。
おる。おる。おる。おる。おる。おる。おる。秀川

蠣 (名) 石花。おる。おる。おる。おる。おる。おる。
おる。おる。おる。おる。おる。おる。おる。雌雄

おる。おる。おる。おる。おる。おる。おる。おる。
おる。おる。おる。おる。おる。おる。おる。おる。

汐の泡に化したるの藝州廣嶋より出た海中に竹垣を立て自
ら取付くがぶとくあるとより又
いけおく場所を養ひ諸州にい

くゆ味も中和を得く
自然生のゆれは大きくても味不佳

〔非〕 産するものふれは其の坊万籟
坊ひきや我ふはぬ水も其角

蠟舟 浪花川岸所々舟と出
てかき商ふ皆廣嶋より

来りて他國の者も冬月来るに
同日ふ来り越年して又同日ふくる

〔非〕 蛸舟の尻よりさきまで利全
坊ふはぬもの人々の厂 支岳

〔狂〕 蛸舟と浪の宿乃おきお
るしるく人のおきいさる 道足

鯨 鯨突△鯨舟△鯨突△鯨魚
〔名〕海鯨。雌と鯨とい

い雄と鯨とい一鯨といさるの事
おふらの形と大なることを見立る

〔非〕 産するものふれは其の坊万籟
坊ひきや我ふはぬ水も其角

〔狂〕 産するものふれは其の坊万籟
坊ひきや我ふはぬ水も其角

氷魚 氷魚使昔八宇治川上川
等より此魚を貢物奉じ

とぞこれと氷魚の使とり委し
九ノ丁網代町の条に見る

〔非〕 産するものふれは其の坊万籟
坊ひきや我ふはぬ水も其角

〔非〕 産するものふれは其の坊万籟
坊ひきや我ふはぬ水も其角

〔非〕 産するものふれは其の坊万籟
坊ひきや我ふはぬ水も其角

〔非〕 産するものふれは其の坊万籟
坊ひきや我ふはぬ水も其角

〔非〕 産するものふれは其の坊万籟
坊ひきや我ふはぬ水も其角

網代 △網代木△網代守△網代人
△川岸より木はらうて網

の廣がりたる形ありて氷魚のたぐ
よひくいねを再び出るを待さる
ずいとも細のかかりねを待つる
ころといふ意にてありろといふ是す
くひ取ものを網代人も網代守も
いふ委しく九月生類四十二丁ふ出

哥拾遺集

元輔

月影の面上の川よきとけきハ
あゝろのいこのよきも人へたれ

慈田

新古今
網代本よきとけきのきふけく
いとりやねぬるやうほの舊い文

金葉

皇后宮肥後

おまのよる川せよる網代本ハ
く川きくまの川きくま
夫木ふけよりの川のりろハ
腐のきくまをわたりたる貫之

俳
あんなにきくまを公せて網代も支考
あんなに網代のきくまを考ても芭蕉

狂
どうも人因果きくまや小車れ
あゝろの果のいとふろも貞徳

夜與
冬の夜山中の獸を狩時大
を引くこれとよきといふ

柴漬
柴とふといふ古言に生柴
と枝葉とも三四尺つふ切

く川水の浅きところ積事水の面
より少高し左とれ難小魚ハ柴の下
ふ集るくふおひく網を四方ふ張る
柴を去れハ魚とくくゆふ入これ
寒気の時れこ立春後川水ゆ
わふわうてハ魚柴の下ふ集らば
。波伏見其外所々ふたれどもとて
て水の浅き所めくふ事なり

哥
夫木ふけよりの川きくまを
のふかきまをいふと人俊頼

竹筍
△釜 魚梁の末ふけ置る
△のどれりなり魚梁に

のりふけ入る器に竹やう作る
能
なやう見て機屋のいハ竹やハ二又

哥
万葉正にふきふておきくろりハ
つゝのやとを我ぬすといふ

潤眼 潤の種類四く長し眼大
うるやうるめといふ

非 正隆中孫ふま鏡の怪眼が十調
而初の妻宅へ来るうもえれ乙州

狂 狂なるいふくうりれ時ハ十五
徹ふかへくる目玉やうたり貞柳

河豚 乳。河豚家の味いふ似と
るや名づく。物ふれいり腹ふ

くもへふぐとら古石ふぐなるの
畧なり。毒の魚いある人喰ふ

へうは西施乳といふ其腹の和
うらうと美人の乳ふたふるうり

狂 名ふまうらふね又味もふあを
ふくはいめをわけて勢人 道楽

妙。うぐの毒ふらうたりとたは
菜つハの葉のふけう汁と用也し

生海鼠 海鼠△金海鼠。とて
と虎彫ふ似る故名く

非 海鼠を八咽を同のふけふ 止水

海鼠 彦火々瓊々杵尊ノ時諸魚
故事皆仕へ奉ルヲ申ス海鼠獨リ

モノイハズコレニヨツテ天ノ鈿賣命
細キ小カラ以テ其口ヲサク故ニ

今ニオイトテ海鼠ノ口拆タ是ナ
リ云云日本紀ニ出

海鼠腸 非 ともや尻花のちり
れされあを 完中

鮓 〇はつのも。大なるは王鮓中
やうと叔鮓小うと銘子東国

あゝゆぐろといふ西国を鮓と大魚
あるや他国も切賣と大魚の切身と

いつ初鮓のけいこ昔賞いたるあ
ふみのさうふ今賤物と成て上用は

哥 万葉 鮓つくとあふれもせるいさ
火のちみ出る人我下おひと

必用 此部ハ三冬の要用れ
事ハ集のしるす

養生 又ハ夜早くいねて朝ハ日れ
出るをもちて起るをいふとい

冬占候 づの寅の日づの卯の日雨ふれば来春五穀

のゆく高し又かゝの寅の日づの巳の日雨ふれば同あつたう

きのへ子午雨ふれば牛羊おなく死しつらめ卯の日風あれば人民大

煩ふ尤風ふくく土煙をくく雲のくく空まはじりて黄なる色有

い吉慶なり黒色赤色なる火災あり紅紫を吉なり

冬天氣 忽ちぬくある雨へ巳午の日晴れば其月雨多し未

戌の日曇き其月雪多し申酉の日晴は其月霜多し子亥の日雨は其月甚寒

飲食 此部ハ冬をかんかめく製する食物を集む

切干 冬大根又ハ蕪を薄くきりて干し貯へ常にお煮て喰ふ

莖漬 △莖菜。大根の葉もに塩漬ると莖漬といふ

生薑酒 酒ハ生姜と和る(俳)も酒ハ生姜のゆに可風

(狂) 必とふはるかせけとわんととあはかしくも酔ふ世ふこととされ徳四

鶏卵酒 酒ハ玉子と和りたる妙なる仕やハ料理重宝なり

鍋焼 (俳) 湯やきやあつた口焼くなり 花羅

杉焼 杉の香と魚肉をこれ移さん(俳) 杉板のくへわくやん

箱あゝ煮るなり

(俳) 杉ややいていふぬ底の底一丸

風呂吹 △大根をききかき吹く吹。大根を湯煮又

いりゝみろとくく食い

(俳) ふらふら客やけのふみり杜橋

(狂) 必とふはるかせけとわんととあはかしくも酔ふ世ふこととされ徳四

納豆汁 大豆を煮て土壺に入しを待くといふ包

